

強く・優しく・謙虚に

株式会社福井新聞社

代表取締役社長

吉田 真士 氏

トップの

The president's real face

素顔

vol. 12

Profile

昭和49年生まれ、平成9年3月慶應義塾大学理工学部卒業、同年4月福井新聞社入社。平成17年取締役総合ビジョン担当・総務局長、18年常務取締役経営企画デジタルコンテンツ室担当、20年専務取締役広告・販売・総合メディア開発担当、23年3月代表取締役専務、統括・関連会社担当、同9月代表取締役社長就任。福井商工会議所副会頭、福井経済同友会代表幹事など多数の公職を務める。

DATA

創業：明治32年2月
電話：0776-57-5111

本社所在地：福井市大和田2丁目801
従業員：272人（2025年5月現在）

普段、垣間見ることが出来ない福井商工会議所の議員の素顔を探る「トップの素顔」。今回は(株)福井新聞社の代表取締役社長を務める吉田真士氏にお話をうかがいました。

「九死に一生を得た幼少期

創業家の男3兄弟の次男として誕生した真士氏。3歳の時、ベットの猫からの感染症で血小板が減少する難病に罹患し、出血が止まらない状況に陥った。父・耿介氏が知人らにお願いして回り、入院先でたくさんの人から直接輸血を受け一命をとりとめた。後に入社した際「俺はお前に血をあげたぞ」という先輩が何人もいたという。この経験から「死んだらどうなるのか」「宇宙の果ての仕組みとは」といった考えを幼いながらに抱き、夜眠れなくなるほど想像を巡らせていた。一方で、夕暮れまで町内を駆け回り、公園での野球や虫取り、川遊びなど活発な小学生時代を過ごした。中学・高校ではサッカー部に所属、レギュラーとして活躍し、高校時代は守備の要であるリベロとして県大会準優勝を経験した。部員同士で自主練習や筋トレを行うなど切磋琢磨し、ストイックにサッカーに打ち込んだ結果だった。

2歳上の兄の後を追いつ、同じ慶應義塾大学理工学部に進学。C言語で画像圧縮プログラムを作るなど研究室で学ぶ一方、飲み会や麻雀に明け暮れた。下宿先が大学から近かったため、最長3週間連続でクラスやサッカーサークルの仲間が大勢居座り、笑い声が絶えなかった。アルバイトではイベントスタッフとしてJリーグ開幕戦にも関わり、名選手を間近で見たことが思い出し、深い。「東京で暮らしたことで、どこへ行っても気後れしなくなった」と回想する。

大学卒業を控え東京で就職活動が始めた矢先、兄が東京に残ることを決めたこと知り「兄が2人して実家のことを全部弟に押し付けるわけにはいかない」と帰郷を決意。母から「他の企業に入るより福井新聞社に入ってはどうか」と勧められたこと、記者だった父を尊敬していたこと、そして新聞記者という仕事に面白みを感じたことで、思いがけず福井新聞社へ入社した。

「現場で鍛えられた記者時代」

20代は仕事にがむしゃらに打ち込んだ。スポーツ担当から始まり、敦賀支社、報道部、政治部と部署を渡り歩き、数多くの取材経験を積んだ。甲子園や

国体の現場は感動がいっぱいで、選挙や事件事故の現場は緊張の連続だった。海外取材でメキシコ、ジャマイカ、ホンジュラスを一人で回ったときは「生存本能に磨きがかかった」。9・11同時多発テロ発生時には夜更けに会社へ駆けつけ、多くの記者仲間が自然と集まってくる光景に改めて仕事への情熱を掻き立てられた。毎日のように社内外の仲間や先輩らと片町で食事し、人としての振る舞い方や考え方を学んだ。同じ職場で一緒に汗をかいた同僚との思い出を振り返り「若い頃に一緒に仕事をした仲間が今も周りにいるからこそ助けられている」と語る。

「父の急逝、経営者としての苦悩」

平成16年末に当時社長だった父が急逝し、環境が一変した。総務、経営企画などの職場を経て、平成23年には社長に就任した。「一般社員から急に役員になって、先輩たちが部下になり、仕事が変わり、苦しいことがいっぱいあった」と振り返る。創業家の立場でも「（能力を示して）社内外でしっかり認められない」とこの立場にいてはいいけない」という思いが強かった。時代変化に合わせて会社を変革する必要性を強く感じ、社内で見解がぶつかること

も少なくなかった。その中で大事にしてきたのは「会社は決して創業家のものではない」という考え方で、現場の意見を尊重。リーダーがしっかりとしないと組織がふらつくし、偉ぶっては組織が萎縮するので謙虚さを忘れてはいけない。バランス感覚を大切に、よく思い出したのはレイモンド・チャンドラーの小説に出てくる「人は強くないと生きられないが、優しくないと生きていく資格がない」という言葉だ。

デジタル対応を業界でもいち早く進め、「ふくアプリ」をはじめとする新規事業を積極的に展開。ユーザーに支持されたメディアに贈られる「LINEメディア賞」の地方メディア部門で大賞を3年連続受賞するなど、情報発信で先進的な取り組みを継続している。今後について「社員には福井のためになるなら何をやってもいいと常日頃伝えている。他社に先駆けた」とがったこと」にも果敢に挑戦し、それで福井のためになれたら一番良い」と語る。

「休日は料理で気晴らし」

趣味は休日の料理作り。朝食から始まり、一日中キッチンにいることも多い。冷蔵庫の残り物をリメイクしたり、スパイスからカレーを作ったり「一番

の気晴らし」だという。家族みんなでスーパーに行ったり、家庭菜園の世話をするのも楽しみ。朝ドラ、アニメ、漫画などは家族共通の趣味だ。父が仕事で家にいなかった寂しさを知っているから、極力家族との時間を大切にしたい。「社員や家族から、後ろ指を指されない生き方をしなければ」と自分に言い聞かせ「陰徳陽報」（陰で徳を積み、陽で報われる）という仏教用語をよく頭に浮かべる。「これまでお会いしてきた先輩たちの受け売り」だが、人知れず道端のゴミを拾ったりトイレの洗面台を拭いたりして「自己満足に浸っている」という。



栗田幸雄元知事（前列左から2人目）の退任時、県政記者クラブで記念撮影（後列右端が吉田社長）